楽曲「手紙～親愛なる子供たちへ～」をご存じですか

ラジオのＤＪの間で「日本人の心を最も動かす歌として、聞く人の心に響き、届き、感動の涙を誘っている」と話題になっている楽曲「手紙～親愛なる子供たちへ～」をご存じですか？

先日、TV 番組「泣け歌」で初めてこの楽曲を耳にし、グッ、グッ、グ～ッときたので、早速 CD を購入した。

石川さゆり等の有名歌手にも楽曲を提供している樋口了一氏が、友人から散文詩を紹介されて、詩に感動して曲をつけたとか。

友人のメールに入った作詞者不詳のポルトガル語で書かれた詩を友人が翻訳して氏に紹介し、氏が「故郷に両親を、そして子を持つ父親として、圧倒的なリアリティ」を感じて曲をつけたとか。

氏は「この歌は、この言葉を必要としている人に、自ら歩いていくような曲」といい、昨年から「こころのポストに届く手紙（うた）」と信じてライブで歌い始めたよう。

人は老いていくと子どもに帰ると云われているが、幼い頃の自分をどれだけ親が思ってくれていたかを感じさせてくれる、親から「親愛なる子供たちへ」の手紙（散文詩）である。

手紙は、「年老いた私がある日　今までの私と違っていたとしても……」と始まり、途中で「私の姿を見て悲しんだり　自分が無力だと思わないで欲しい」と子どもをいたわり、最後に「あなたが生まれてくれたことで私が受けた多くの喜びと　あなたに対する変わらぬ愛を持って笑顔で答えたい」と子どもに語りかける。

高齢者問題というと介護の問題、つまり、子どもにとってもやっかいな問題と思われがちな今の世相だが、今、老いていく身だからこそ子どもに語りおきたい親の心の機微に触れた詩であり、また、そうした親の心に子どもとして寄り添うとはどういうことかを考えさせられる詩でもあるように思う。

兎にも角にも、ネット検索で動画での楽曲の視聴が出来ますので、楽曲は８分２５秒と長いですが、ぜひ一度、試聴してみてください。

阿部幸泰　　（2009 年 3 月 6 日　記）